

第704回番組審議会報告
2026年1月14日開催

■出席委員

佐藤卓己委員長、栗栖義臣副委員長、小川明子委員、川瀬慈委員、
小島幸保委員、曾我部真裕委員、津村記久子委員、長谷川豊委員

■毎日放送出席者

虫明社長、酒井常務、中野常務、高山取締役、磯澤取締役、
奥田取締役、池邊東京制作担当局長、向東京制作部長、
植村プロデューサー、東野コンプライアンス局長、東郷広報部長、
中西番組審議会事務局長

◆審議事項

テレビ番組「日曜日の初耳学」
(2025年10月19日放送分)

【各委員の主な意見は次の通り】

- *ちゃんみなさんは、すごいタレントが出てきたと思った。自己の過去の傷を開示し社会と共有しながら、それを作品に昇華させていく強さや、ルッキズムへの自己を戯画化するような形での挑戦などすばらしい。もっと社会を搖さぶって頑張ってほしい。
- *ちゃんみなさんの音声トラブルへの対応や即時に面白いことを言う瞬発力にとてもタレント性を感じる。人柄のよさも感じられて、若い人がこういう人を好む社会は望ましいと思う。
- *ちゃんみなさんの「音楽ができなかつたらとっくに死んでいただろうと思う」とか、「女性ホルモンは怖い」という発言は、それぞれとても強い言葉なので、番組として何かフォローが必要だったのではないか。
- *「遺書を13歳から書いている」という発言は、13歳から死ぬことを考えて生きるという感覚をカリスマ的に提示している感じがして、社会的に発言力のあるタレントなのでいいのだろうかと感じた。
- *ちゃんみなさんを崇め奉り過ぎているような気がした。持ち上げられ過ぎたため「私は聖人じゃないので」という最後のあの発言につながったのではないか。
- *ちゃんみなさんの令和の叱り方は非常に興味深く見たが、人を叱るのは本当に難しい問題なので、林先生に何らかのコメントをしてほしかった。

- *能登のパートはのんびりとあまり複雑なことを考えずに見られる、日曜の夜にはふさわしい企画だったと思う。
- *能登の旅は常磐さんの温かい人柄が伝わってきて、のどかに見られた。澤部さんの人選は、異性としてのアピールに依存せずに魅力を発揮できる方という点で絶妙だと思った。
- *能登の題材自体は復興の歩みを伝える意義がある企画だと思ったが、復興の著しい遅れが社会的に深刻な問題になっている中で少しあはしゃぎすぎでは感じた。
- *ちゃんみなさんの前半と能登のシーンがあまりにもギャップがあって、少し組み合わせを考えたほうがいいのではと思った。
- *能登のパートについて過去の放送の説明がなかったので、急に3人出てきて能登に行って稻刈りしている印象になっていた。継続して放送している企画であるという説明や、常磐貴子さんがとても熱い思いを持っているという点をもっと伝えてよかったです。

【番組制作側の説明、質問への回答】

- *遺書や死に関する話にどれくらい踏み込むか議論になったが、番組全体を通して見ていただいたら意図は理解してもらえると考えて、特に過剰なフォローはしなかった。
- *崇め過ぎていないかという点については、この回に限らず常に気をつけている。出演者へのリスペクトは大事だが、持ち上げ過ぎていないかどうか今後も気をつけたい。
- *ちゃんみなさんと能登を組み合わせて放送したのは、前半を見た若い方に後半の能登のような企画もしているということを知ってもらいたかったため。能登の復興については今後も継続して伝えて行きたい。

以上